
next SAYA's STAGE

鈴仙 R

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

next SAYA's STAGE

【Nコード】

N1405Z

【作者名】

鈴仙R

【あらすじ】

幸せを掴みとったと思われた理樹と沙耶

そんな二人に新たな試練が立ちはだかる

a l i v e S A Y A 第2部（前書き）

理樹「みんなに紹介するよ、新しいメンバーだよ」

理樹君の一言で私は晴れてリトルバスターズの一員となった

私は私が駆け抜けたかった青春の日々を駆け抜け始める

そう、信じて疑わなかった…

運命はいつも過酷で唐突に終わりを告げる…

それはとても悲しく切ないもの…

これは私の物語

a l i v e S A Y A 第二部

n e x t S A Y A ' s S T A G E

alive SAYA第2部

恭介「よし、今日はここまでにしておくか」

理樹「沙耶いい動きだったね」

沙耶「当たり前じゃない、私を誰だと思っているの？」

リトルバスターズは主に野球ばかりだった、私は野球なんてやったこともなかった、でもとても新鮮で楽しかった。

これも青春ね、

理樹君には感謝しないとね、私の手を引っ張ってくれる、私が知らないことを教えてくれる不思議な人

ぼく………な………は

あれ？何だろう…私、何か忘れてるのかしら？

理樹「どうしたの？沙耶」

考え込んでいるうちのいつの間にか理樹君が私の顔を覗き込んでいた

沙耶「ううん、何でもないわ」

理樹「そう、ならいいけど」

私はきつと何か大事なことを忘れている…そうに違いない…

私の…大事な記憶なんだと思う…

でも今は私の送ったかった今を過ごすことにしよう

そうよ、昔なんて関係ないわ私は今幸せなんだから

そして理樹君が私を呼ぶ声がする私はその声に答えるように歩みを進めた

声の元にいくとデートのお誘いだった、理樹君も攻撃的になったわねでも私は嬉しかったのでデートに行くことにした

理樹「どこか行きたいところある？」

沙耶「そうね…またあのゲームセンターに行きたいわ」

理樹「いいよ、じゃいこっか」

理樹君はいつもの無邪気な笑顔をを見せて、私の手を引っ張る
沙耶「いよっしゃあああああ？」

私はまたあのモードになっていた

沙耶「ふゝ大量大量？」

理樹「沙耶はまったく凄いな」

沙耶「もつと褒め称えるがいいわ！」

充実した時間だったわ、私は楽しかったけど理樹君はどうだったかしら

愚問だったわね

理樹君も楽しそうだったわ、ただ、少し困っていたけど

理樹「あれ？あれは、鈴じゃないかな？」

沙耶「呼んでみましょうか、鈴ちゃーん」

まるで名を呼ばれた猫のように、体をプルツと震わせこっちを向いた

鈴「なんだ？理樹、沙耶」

沙耶「姿が見えたから一緒に帰ろうかと思ったの」

鈴「お前らデートじゃなかったのか？」

鈴ちゃんの言葉に私と理樹君は顔を見合わせさらに顔を赤くする

鈴「なんだお前らそんなに顔を赤くして、なんか怖いぞ」

理樹「そ、そういうば、鈴にしては珍しかったね」

鈴「ん？なにがだ？」

理樹「会って間もないのに沙耶ともうこんなに打ち解けてるじゃないか」

鈴「理樹は変なことを言うな」

理樹「そんなことないと思うけど」

沙耶「それより早く帰らない？」

理樹「うん、そうだね、辺りも暗くなっただし」

私たちは寮へと足を歩める

鈴「理樹、ちょっといいか？」

僕は沙耶と別れたあと鈴に呼び止められた

理樹「なに？鈴」

鈴「さっきお前は私と沙耶が会って間もないっていったよな」

理樹「そうだけど…だってそうでしょ？」

鈴「理樹…お前覚えていないのか？」

理樹「え？なにが？」

鈴「沙耶は昔私たちと一緒に遊んでいたぞ」

え？

鈴は今なんて？

僕と沙耶が昔あっていた？

理樹「鈴、それどういうこと？」

鈴「お前が連れてきたんじゃないか？一人だったから連れてきたって」

理樹「そんなことが…」

鈴「でも、ある日から一緒に遊ばなくなった」

理樹「なんで!？」

鈴「……………」

鈴は黙り込んだ

理樹「ねえ、鈴教えてよ？」

鈴「悪い私からは言えん、失言だった」

なんだろう…鈴にしては齒切れが悪い言い方だった

真人なら何か知っているかもしれない…聞いてみよう

自室に戻った時真人はいつも通り筋トレをしていた

理樹「ねえ真人」

真人「ふっ…ふっ…なんだ？筋肉をつけるための相談か？」

理樹「違うよ、沙耶についてなんだけど」

真人「沙耶？誰だそいつ？」

え？

理樹「真人、忘れたの？今日一緒に野球やってたじゃないか？」

真人「ああ？誰かいたか？いつも通りのメンバーじゃなかったか？」

そんな馬鹿な！？もう沙耶のことを忘れてる！？

謙吾「よう？なにしてた？」

謙吾「だつたら覚えてるだろう」

理樹「け、謙吾だつたら覚えてるよね！？沙耶のこと」

謙吾「ん？誰だそいつは？」

そんな…沙耶のことを…沙耶のことだけが忘れ去られている！？
なにかが起こりかけている…

きつとそれは大きな試練になる

沙耶が危ない？

やっとなんだ僕と沙耶の幸せなんだ、なんでこんなことになるんだ…

第二部 n e x t S A Y A ' s S T A G E
T H E E N D

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1405z/>

next SAYA's STAGE

2011年12月7日08時47分発行